

Voice of Handball

久保 弘毅

Vol.
166

PROFILE 1971年生まれ。アナウンサー時代にハンドボール中継に携わり、8年連続でブレーオフ男子決勝を実況。その後フリーのスポーツライターとなり、ハンドボールやアマチュア野球などの取材を続けている。



11月30日からの熊本世界女子選手権に臨む日本女子代表・おりひめジャパンのキャプテン原希美。気さくで、ファンへの対応、取材の受け答えも堂々としたものだが、初めからそうだったわけではない。彼女のリーダーシップは、どう形作られていったのか。

長年日本女子代表を見てきた高野内俊也トランナーは言う。ほどよく肩の力が抜けた原のスピーチから、彼女の内的な成長がうかがえる。
子どものころから「がんばること」がアイデンティティーだった。ハンドボーラー始めた延岡東小スポーツ少年団(宮崎)では、激しいプレーで前歯が吹っ飛んでしまった。みんなあわてながら「ノンちゃん(原の愛称)の前歯、どこ行

ともに戦おう
日本女子代表キャプテン・
原希美のリーダーシップ
がんばる子

「みなさん、こんにちは」

日本女子代表のキャプテン・原希美(三重バイオレットアイリス)のスピーチは、この何気ないあいさつで聴衆の心をつかむ。柔らかく、自然なトーンが心地いい。

取つてつけたような「それっぽい」言葉ではなく、自分の頭と身体を通過した言葉で、その場の人たちに話しかける。日常会話の延長のようで、碎けすぎることもなく、真つすぐな思いが伝わってくる。「こんな気の利いたスピーチのできる子じゃなかつたんですよ」

長年日本女子代表を見てきた高野内俊也トランナーは言う。ほどよく肩の力が抜けた原のスピーチから、彼女の内的な成長がうかがえる。

子どものころから「がんばること」がアイデンティティーだった。ハンドボーラー始めた延岡東小スポーツ少年団(宮崎)では、激しいプレーで前歯が吹っ飛んでしまった。みんなあわてながら「ノンちゃん(原の愛称)の前歯、どこ行



日体大時代の原。学生時代から守れるロングヒッターだった

た？」と探したこと。

「宮崎学園高（宮崎）では、攻守にチームを背負う存在だった。高校の女子はシート力が弱いので、守り合いになることが多い。チーム内の構成も「絶対的エースと、その他大勢の守る人たち」になりやすい。エースは「お前は点を取つてくれたらいいから」と、DFでは甘やかされる。その結果、170cmの「打つだけの人」が量産され、攻守のバランスの悪さから伸び悩むケースが多く見られる。

しかし原は、そこらのエース候補とはワケが違った。打つだけじゃなく、守つても真ん中でファイトする。身体接触をいとわず、ルーズボールには率先して飛び込む。額に汗して働く選手を好む日体大女子部の辻昇一監督は、原のハードワークに惚れ込み、宮崎学園の鈴木晃監

督のところまで直接出向いた。辻監督の誠意を感じ、原は日体大を選んだ。

日体大でもチームの大黒柱だった原は、三重バイオレットアイリスでも1年目から活躍し、日本代表に選ばれている。当時の原のイメージは、スコアで言つながらロンジショートを打ち続ける。チームでほかに点を取れるオプションがないから、自分が打ち続けるしかない。まさしく孤軍奮闘だった。

試合に負けると、よく泣いていた。負けに慣れていた当時の三重の中では、異質とも言える存在だった。そういう原の熱を煙たがる選手もいたという。「代表に選ばれてるからって、お高くとまつて」といった陰口も聞こえただ。でも、原は自分のスタンスを崩さなかつた。真っ向から対戦相手と向き合い、1年目から勝負の責任を背負つて、「コート上でだれよりも懸命にプレーした。だが、白星は遠かつた。

キャプテン就任後に大ケガ

原が三重に入つて3年目に、櫛田亮介監督（現チームマネージャー、日本代表コーチ）が就任した。現役時代にHon daで学んだ櫛田監督は、理にかなつたハンドボールでチームを強くしていくた。チーム全体のOFのバランスが整つた結果、原の打数は1、2年目よりもかなり少なくなった。

「なんか私らしくないんですね」



三重の櫛田チームマネージャー（写真中央）は原を、ラグビー日本代表のリーチマイケルにたとえる

日本代表にたとえて説明している。

「チームを立ち上げる時は、廣瀬俊朗のような聰明で、強烈なリーダーシップを持った人間をキャプテンにして、基盤を作る。ウチで言つたら、前の年までキャプテンだった漆畠美沙ですね。

ある程度チームが軌道に乗つたら、今度はリーチマイケルみたいな武骨な選手をキャプテンにして、その代わりに周囲にサポートする選手を何人か置く。そうすれば、キャプテンも気を回しそぎなくて済むし、周囲も成長できます。ウチで言えば、リーチマイケルが原です」

このたとえはとても分かりやすい。ドラマ「ノーサイド・ゲーム」での好演で注目された廣瀬は、頭脳明晰で求心力があった。リーチマイケルはいつも密集に参加し、仲間のため身体を張る。「バイオレット史上最高のキャプテン」とも言われた漆畠と、漆畠を慕つて三重に来た原との関係によく似ている。櫛田監督は原をキャプテンに据えると同時に、いくつかの部門ごとのリーダーを選び、原をサポートする体制を整えた。

強い気持ちでチームを引っ張ろうとい、勝ってきた。ところが、1試合のシート数が5本ぐらいで終わることが多くなつた。完全燃焼した感じがしない。それが先ほどの「私らしくない」発言の真意である。

櫛田監督体制2年目の2016年から、原は三重でキャプテンになつた。原を抜擢した理由を、櫛田監督はラグビー

思うように身体が動かず、復帰してもDF中心でプレーするのがやっと。攻守両面でチームを引っ張れない状態で、それでも三重と日本代表をまとめてはいけない。原は悩みに悩み抜いた。

の「メントがよかつた」。

「バイオレットがいい時は、仲間を信じ合えて、苦しくても『このメンバーでやるぞ!』というのが言葉でも出てくるし、みんなの表情やプレーからも湧き出でいて、本当に1つになれているなど実感します。開幕からの数試合は、それがうまくいかない時に人のせいにしたり、自分の世界に閉じこもつたりとかがありました。今回のホーム3連戦は、自分が調子が悪くても、だれかがフオロ(援団)の応援が力になつたり、みんながしてくれたり、シユーターズ(三重の応援団)の応援が力になつたり、みんなが1つになつた結果が3連勝につながったと思います」

背負うものが増え、自分の100%を出せなくなつたにもかかわらず、しばらくすると原の表情が柔軟になつた。試合中にも笑顔を見せるようになつた。歯を食いしばつてがんばるのが「原らしさ」だったのに、思わぬ方向転換である。
2018年1月の日本リーグで、三重はホームで3連勝している。この時の原

く影響していると、スタッフからも言われました。自分がプレーできなくて、悔しい感情を出していくなら、周りもついてこない。だから笑顔でいようと、昨シーズンは心掛けていました。それが今シーズンは自然にできている。無理なく笑顔でいられます」

このあたりから、原の笑顔は「持ちネタ」になってきた。若手が辛そうな顔をしていたら「苦しい時は私見て!」とほほえむ。試合前の田陣では「みんな、大好きだー」と、笑顔で叫ぶ。原の突拍子のない発言にみんなが笑い、いい具合に肩の力が抜ける。

日本代表でも、原の笑顔は武器になっている。代表の副キャプテン・永田しおり(オムロン)は言つ。

「原は、苦しい時やタイムアウトの時に『スマイル』と言います。それでみんなが笑顔になつて、チームの雰囲気がほぐれるんです」

代表ではウルリク・キルケリー監督の存在が大きい、と原は言つ。

「フルリクも大事な場面ほど『スマイル』と言つてくれるし、私が険しい顔をしていたら、みんなに伝染してしまって、意識的にスマイルでいるようにしています」

自分のことだけで精いっぱいだったのが、ちょっと無理して笑顔を作るついで、いつしかそれが自然になつた。仲間にも

「ヒザをケガして、それでもキャプテンで、どうやってチームを引っ張つていけるかを考えていた時に、自分の表情や声かけがみんなにすご



自然な笑顔



永田しおり(写真左)と原。ともに日本代表のDFの要で、キャプテンと副キャプテンのコンビ

いい表情が波及するし、自分自身の余裕にもつながつた。

原の変化を感じていたのが、三重で7年間、原とともにDFの中心を守ってきた万谷由衣だつた。万谷と原、以前はあまり仲がよくなかったといつ。

「原はグッと歯を食いしばつてやりたいタイプ。私はフツと笑つていていいタイプ。こっちからしたら『なんでそんなに怒つてるの?』と思う時があつたし、向こうからしたら『なんで笑つての?』と思つ時もあつたでしょうけど、それが3~4年前からかみ合つてきたのかな。昔はバチバチでしたけど、今ではどなり



攻守にできることの幅が広がり、人間的にも深みを増した

「ただ、昔からの『原らしさ』もたまに顔をのぞかせる。今年

ムの窮地を救つたのが原だった。

「多田仁美にマークが厚くて、センターの林美里の調子もよくなくて、もうここは行くしかないなど。迷いなく受けたことが得点につながりました。ステップシュート、入るようになつたんですよ。器具用になつてきたのかな?」

この日の原はアウト割りや、河嶋英里からのリターンパスをもらつて1歩で打つステップシュートなど、多彩なシュートでチームを落ち着かせた。この日の成績は7／11。高確率で、試合の流れを呼び寄せている。周りが苦しむ中でも、原のプレーには余裕が感じられた。

「今は『キャプテンだから、こうしなきゃ』ではなく、自分の役割や試したいプレーを思い切りやっているんで。以前は1つのプレーにこだわっていましたけど、今はそういうこだわりはまったくない。いろいろできるようになって、今は楽しいです」

けつして器用とは言えなかつた選手が、ハンドボールを通して柔軟な思考と人間的な魅力を身につけた。プレーの幅は、原の人間的な幅と言つていい。

6月の日韓戦に敗れたあと、観客席から「やる気あんのか!」との声が飛んだ。その言葉を聞いたとたんに、原の表情はこわばり、涙が止まらなくなつた。

「あの時は、真に受けてしまつたのがいけなかつたかな。『そういうところは、プロとしての振る舞いを覚える必要があるね』と、ウルリクからも個人的にアドバイスをもらいました。私、すぐ泣くんでしょうね。悔しくても泣くし、うれしくても泣くし、なんでも泣いちゃう」

受け流せない誠実さは、時にもろさにもつながる。だが原は、ファンの想いにいつも誠実に答えてきた。所属の三重では、ホームゲームで負けても、観客の前でしつかりとあいさつする。以前は、そういうことをだれよりも嫌がるタイプだった。今は、結果は結果で受け止めながら、自分の言葉で気持ちを伝える。

「悪いところが全部出たよつな試合でも、60分間応援してくれた高校生やシユーターズのみなさん、会社の人たちへのあいさつやお礼は大事なんだと感じています。自分がなんのためにハンドボールをしているのか。なんで三重バイオレットアイリスという環境でハンドボールをやっていけるのか。自分たちの力だけで、今この場に立てているのではないか。そういうことを感じているので、言葉でも表せるようになつたんだと思います」

もちろん所属と代表では、環境が違う。背負つものの重さも違う。その違いを理

解したうえで、原は日本代表でも多くの人たちと「ともに戦いたい」と願つ。「サポーターの力を、自分たちのプラスの力に変えていけたら。シュートを決めて、パフォーマンスでサポーターの声援をあおつたりとか、男子の代表はそういうのが上手ですよね。土井杏利さん(大崎電気)がキャプテンになつて、男子は変わりました。杏利さんは周りを巻き込んでいける人なので、見習いたいですね。せつかく世界選手権が日本で開催されるんだから、1つになつて戦わないとい

11月30日から熊本で、女子の世界選手権が始まる。原希美をはじめとするおりひめジャパンに、熱きエールを。

にいるのが当たり前になつて、それが安全感になつています。原がどう思つていかかるは分かりませんけどね」

今は互いの声かけで、試合中に笑顔を取り戻し、ともに助け合える仲だ。今年度から三重では万谷がキャプテンになり、代表活動が多くなる原の負担を少なくしている。

1つになるため

笑顔を覚えた原は、以前よりも肩の力が抜け、全部を自分でやろうとしなくなつた。その一方で、勝負の節目を感じ取る嗅覚は鋭くなっている。

今年2月の日本リーグの飛騨高山ブ

ラックブルズ岐阜戦。3年連続ブレーイン進出をめざす三重は、ブルズの変則的な5・1DFに苦しみながらも、1点差で勝利した。内容のよくない試合で、チー

ムの窮地を救つたのが原だった。

「多田仁美にマークが厚くて、センターライアの調子もよくなくて、もうここは行くしかないなど。迷いなく受けたことが得点につながりました。ステップシュート、入るようになつたんですよ。器具用になつてきたのかな?」

この日の原はアウト割りや、河嶋英里からのリターンバスをもらつて1歩で打つステップシュートなど、多彩なシュートでチームを落ち着かせた。この日の成績は7／11。高確率で、試合の流れを呼び寄せている。周りが苦しむ中でも、原のプレーには余裕が感じられた。

「今は『キャプテンだから、こうしなきゃ』ではなく、自分の役割や試したいプレーを思い切りやっているんで。以前は1つのプレーにこだわっていましたけど、今はそういうこだわりはまったくない。いろいろできるようになって、今は楽しいです」

けつして器用とは言えなかつた選手が、ハンドボールを通して柔軟な思考と人間的な魅力を身につけた。プレーの幅は、原の人間的な幅と言つていい。



原と日本代表キルケリー監督(写真右)。2人の会見はウイットに富んでいる